

Title	チベット語の「母方のオジ」を示す語彙
Author(s)	長野, 禎子
Citation	内陸アジア言語の研究. 8 P.111-P.125
Issue Date	1993-03
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/16557
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

チベット語の「母方のオジ」を示す語彙

長野禎子

チベットの親族関係名称は、チベットのみならず、シナ・チベット系諸民族の言語文化を知る上で重要なトピックであり、文化人類学・史学・言語学の方面で古くから論議されてきた。しかし、資料的な限界やフィールドワークが必ずしも充分に行なえない事情から、その研究成果は全体的な見通しを与えてくれる段階に至っていない。

最近になって敦煌出土チベット文献の研究が進み、また、いくつかの詳細な現地調査の結果がまとめられて、ようやく親族関係名称の体系を構造として演繹できる入り口に到達したように思われる。小文では、従前のチベット親族名称と婚姻のあり方についての諸説を振り返り、問題点を指摘するとともに、チベットの社会構造を考える上で最も留意すべき「母方のオジ」について、文化人類学的モデルに立脚した解釈を示しておきたい。

1 P. ベネディクトの仮説とその批判的検討

ベネディクトは東アジア諸語、とりわけシナ・チベット比較言語学に独自の見解を持つ言語学者で、彼の再構成したチベット・ビルマ共通祖語形式 (Benedict 1972) は、かなりの問題点を含んでいるものの、体系的に示された形式として現在の学界でそれなりの評価が与えられている。彼はハーヴァード大学で人類学を学び、1941年に東南アジア諸民族の親族名称についての学位論文、1942年には、チベット語と漢語のそれに関する論文を公にしたが、このふたつの論文によって我々は彼の仮説の全貌を知ることができる。

特に1942年論文はチベット語に直接関連があるものとして重要である。彼の研究はチベット語、ないしシナ・チベット諸語における親族名称とその意味の古い層を文献資料の比較によって再構成し、その体系と個別語彙の歴史を明らかにすることを目的としており、現地調査に立脚したものではない。

彼はチベット・ビルマ (TB) 諸語の古層を代表するものとしてチベット語文語形式 (WT) を取り上げ、そこから24の基本的親族名称語彙を抽出して、それらの体系を分析した上、それぞれについて古い形式と意味の再構を行なった。⁽¹⁾ ベネディクトは「我々は一般的に見て交叉イトコ婚が顕著な特徴をなしている漢民族及びチベット・ビルマ族の両文化の基底に横たわる古い文化層について稀に見るほど鮮明な実像を供与される」(Benedict 1942:337) と結論づけている。だが、この結論に至る過程において、TB及び漢民族の親族名称の比較、漢語などに見られるテクノニミーの慣行(子や孫がある人を呼ぶのに用いる呼称を両親や祖父母が採用する慣習)等の類推が用いられており、問題が残る。今ここで我々は、チベット独自の親族名称体系の検討と近年解き明かされたチベット古代史の史的事実や文化人類学における構造分析を援用して、チベット社会が外婚父系リネジ・母方交叉イトコ婚の社会であったことを推論できる。

まず言語事実として、父系外婚制を反映する親族名称についてみると、例えば、

- | | | |
|----------------------------|---|------------------------------|
| 1) rus pa gcig | : | sha gcig |
| 「同じ骨＝共通の祖先から
出自した父方の親族」 | | 「同じ肉＝婚姻によって生じる間柄」
(註2 参照) |
| 2) khu 「父方のオジ」 | : | zhang 「母方のオジ」 |
| ne 「父方のオバ」 | : | sru 「母方のオバ」 |
| 3) tshan 「イトコ」 | : | tsha 「母方のオイ・メイ、姉妹の
子、孫」 |

(1) 婚姻の基本的な形態としてイトコ婚があるが、人類学ではさらに2種のイトコを区別する。父母と同じ性の兄弟姉妹の子、すなわち父の兄弟及び母の姉妹の子 [= 平行イトコ] と、父母と反対の性の兄弟姉妹の子、すなわち父の姉妹及び母の兄弟の子 [= 交叉イトコ] がそれである。多くの社会では「平行イトコ」との結婚を厳禁し、「交叉イトコ」との結婚(「交叉イトコ婚」)を選好あるいは規定する。それには近親婚禁忌の考えが根強く背景にあり、「平行イトコ婚」は系譜の上で自己と同一の集団に帰属する者との結婚を意味し、外婚制に反すると見做されるからである。

さらに、「交叉イトコ婚」には「母方交叉イトコ婚」(母の兄弟の子との結婚)と「父方交叉イトコ婚」(父の姉妹の子との結婚)の2形態が区別される。このうち前者が優先されたり義務づけられる社会は、父系・外婚制・夫方居住形態(結婚後、夫の居住地に移り、そこで生活する形態)をとる社会であることが圧倒的に多い。

父方のオバは ma「母」と同じ語でも呼ばれるので、婚出しなければ自己（男性）と同じ血縁集団に属することになり、結婚の対象とはなり得ない。現代語では意味の拡大がなされているが、本来 tsha は zhang「母の兄弟」との結合で用いられ、khu「父の兄弟」と結合しない。tshan「イトコ」は pha-tshan「父方のいとこ」、khu-tshan「父方のオジとオイ」というように用いられ、父方親族名称と結びつく。

以上見てきた例から分かるように、チベット文語の親族名称は父系外婚制の社会構造を反映している体系と考えてよい。この点に関してはベネディクトの推論もほぼ一致する。近年の山口（1983）による歴史的考証（第2節に概観する）もこの言語的論証を支持する。

チベット古代の吐蕃王朝成立以前の社会に我々は父系外婚制が行なわれていた形跡を見いだすことができる。ボン教史を扱った Dar rgyas gsal ba'i sgron ma にヤルルン王家の遠祖ニャティ・ツェンポのかなり以前、4大部族のうちのム族とピャー部族（後にその一派がヤルルン王家の祖となる）について「Phyva 国の御父ピャーの主と御母 dMu の妃との結婚」と「御母ピャーの女 Ngang zang とム国の御父ムの王との結婚」の記述があり、敦煌文献 Pelliot tib. 126 裏にもピャー族がム族に婚姻を申し入れた経緯が述べられている（山口1983: 159-172）。山口（1983）はム族もピャー族も共に父系で、この両部族の通婚は2・3世紀には始まっていたと推定している。後にム族はピャー族の最も重要な姻族のひとつとなり、代を重ねて婚姻が行なわれた。上記の婚姻の例からするとほぼ同時期に2部族間で相互の嫁のやり取りがあったと考えられる。

しかし、文献からはその婚姻形態が交叉イトコ婚であったかどうかは知り得ない。また、ベネディクトのチベットの交叉イトコ婚についての証明には、クキ族や漢族との体系の比較や、これらの民族の間で行なわれていたであろうテクノニミーの慣行をチベット体系に当てはめた解釈が施されており、推論として迂遠である。次のような文化人類学の構造的なモデルにしたがってチベットの親族名称を分析すれば、母方交叉イトコ婚の存在が容易に引き出される。

1) 姉妹の息子=娘の夫=義理の息子=義理の兄弟 (図では b2)

2) 母の兄弟=義父=妻の兄弟 (図では b1)

が成り立つ。これは母方交又イトコ婚に特徴的なパターンであり、後代のチベット⁽²⁾の婚姻の習俗やフィールドワークの成果などによって知られる言語外事実を考え合わせるとチベットの社会では父系外婚制の下、母方交又イトコ婚が選好されていたと結論できる。

ところが、チベット語を見ると言語事実としてひとつ厄介な問題が残っている。ベネディクトは母方のオジを表すチベット・ビルマ共通祖語 (PTB) として *ku を再構成しているが、これに対応する WT khu は「父方のオジ」を表す。ほとんどすべてのチベット・ビルマ系諸語では PTB *ku に対応する形式が「母方のオジ」を表すのに対し、チベット語だけは孤立した意味を持っている。

ベネディクトは、チベット語でも khu は本来「母方のオジ」を示す語彙であったが、ある時点でこれが「父方のオジ」に意味転化を起こしたと考える。その理由を彼はチベットに特徴的だとされる「一妻多夫婚」に求めようとした。この場合

(2) (後代の資料ではあるが、) 18世紀初頭にチベットを訪れたデシダリは「チベット人は二つの親族関係を認めている。その一つは、リュパ・チク、つまり『同じ骨』の親族関係と呼ばれ、もう一つはシャ・チク『同じ血』[←血ではなく、肉であるべきであるが、方言によっては血と肉の音形式が非常に近いものになるため、血と肉がすり変わっている場合がある(筆者註)]の親族関係である。彼らはリュパ・チク、同じ骨の親族関係として、たとえいく世代にもわたっていろいろの分家に分かれてきたとしても、そしてどれほど遠くても、共通の祖先から系統を同じくする人たちを認めている。シャ・チク、同じ血の親族は正規の婚姻によってつくられた人たちである。最初の「同じ骨」、リュパ・チクは、それがどれほど遠縁であったとしても、結婚では犯してはならない障壁として考えられている。そして同じ骨の二つの親族の間の性交は近親相姦とみなされ、すべての人が忌避し、ひどく嫌う。(中略)従って、おじとその姪の結婚は許されない。しかし母方の実のいとこの結婚は許され、それはよく見られるところである」(1991: 296-297) とし、父系、外婚リネージの存在と、母方交又イトコ婚が選好されていたことがわかる。同様に、Prince Peter (1963: 423, 1965: 197) は、婚姻規則として機能している rü gyud (骨のリネージ) と sha gyud (肉のリネージ) の区別が存在していることを指摘している。ただし、古代チベット社会の再構成においては、rü は社会の分節単位としてのクランに関連して用いられることが多い(例えば、Richardson 1952: 50-51, Tucci 1955: 204-205)。rü の概念についての文化人類学的立場からの検討とまとめは、Aziz (1977) と Levine (1981) に詳しい。

の「多夫」は兄弟である。彼によれば、兄弟一妻多夫婚のシステムのもとでは父の兄弟は母の夫でもあり、極めて重要な役割を果たした結果、交叉イトコ婚の体系下での母の兄弟(=義理の父)が果たしていた機能をも我がものとしたのである。ここに「母の兄弟」→「父の兄弟」という意味転化が起こった(Benedict 1942: 317-8), と。

この理由づけは、しかし、余りに恣意的である。重要な役割が母の兄弟から父の兄弟にシフトしたと言うなら、例えば婚姻体系や社会体制の激変のようなことを前提としなければならない。また、兄弟一妻多夫婚がそのシフトの原因だとすること自体にも問題がある。なぜならば、兄弟一妻多夫婚の場合、最も強い権限は長兄にあり、それを凌ぐ「重要な役割」が弟達に帰せられたとは考えにくいからである。

さらに言うならば、兄弟一妻多夫婚は特にチベットのとは言い難い。この婚姻のあり方はインド亜大陸周辺部やユーラシア大陸北方に広く分布しており、それらの諸民族に同様の意味転化があったかと言うと、必ずしもそうではない。⁽⁴⁾

レヴィ=ストロース(1978: 656)は、チベット社会がある時点で母系制から父

(3) Grenard (1974: 253) はチベット人の一妻多夫制を絶対的の家長制度(長男を中心とした家族の統合)の一つの形態と考えている。

インド・ヒマラヤ・チベットにまたがる一妻多夫制を調査したPrince Peterは兄弟一妻多夫制が最もうまく確立した場合は典型的な父系社会であると指摘している。

Goldstein は彼のインド・マインソールのチベット人難民から得たフィールドワークの成果から、土地制度と家長制度との結合の下で兄弟一妻多夫制が発達したと結論している。彼によれば、この制度の下では stem family の家長が、唯一の法的に認められた婚姻家族の代表者となることによって土地の細分割を阻止し、家族の連帯を維持していくことが可能で(1978a)、この制度を外側から規定しているのはチベットの風土と封建土地制度であるとする(1978b)。

親族名称体系においても、長兄は弟達と区別され、長兄を指す語 a-jo あるいは jo-jo は「父」をも意味し、その第一の意味は「殿様」「家長」である(スタン 1971: 90-91)。だから子供はその父を pha-jo 「父君」と呼ぶこともある。(cf. 『藏漢詞彙』 134)

(4) インド亜大陸の周辺部族、ヒマラヤ地区、中央アジア、ビルマなどには、この結婚形態が現在でも多々存在していることがフィールドワークによって確かめられている。網羅的な調査報告としては、Briffault (1927, 1969: 647-676)、Prince Peter (1963) を参照。

レヴィ=ストロース(1978: 656)は、ギリヤーク族は父の兄弟に特別の名称的地位を

系制に移ったからだと考えた方がよいと述べている。それがもっとも素直かも知れないが、今のところそれを積極的に支持する証拠はない。

次にベネディクトは、ブランクになった「母の兄弟」を表す語彙として WT zhang が導入されたとする。この形式は PTB *zrang から来源するもので、例えばクキ語の t-rang, m-rang「父の姉妹の夫、夫の父」やビルマ語 a-hrang < *srang「領主、主人」と比較し得る、とする (Benedict 1942: 318)。しかし、これに平行する対応例は少ない。ビルマ語の例は音節尾部が一致しているけれども、初頭の子音結合は WT では常に高いピッチを持つ初頭音に対応するのが普通であり、WT zh- に対応するとは思われない。

ベネディクトの再構成するチベット・ビルマ共通祖語の時代と我々がじかに確認できるチベット文語成立の時代との間には数千年の開きがあるわけで、その開きの中のどの段階で問題の意味転化が起きたのかを特定するのは困難である。しかし、近年敦煌出土チベット語文献 (主に9・10世紀のもの) の研究が急速に進展し、特にわが国では山口瑞鳳教授による古代史研究 (1983) が、いままで謎とされてきたチベット古代王朝の成立過程を詳細に復元することに成功した。この記述を文化人類学の観点から見直してみると、PTB *kuの「母方のオジ」から「父方のオジ」への意味転化をある程度までトレースすることができるように思われる。

2 吐蕃王国以前のチベット

強大な軍事力を誇る吐蕃王国が長く唐と勢力争いを続け、一時は長安を占領した (763年) ことはよく知られているが、吐蕃以前のチベットがどういう状況だったかは推測の域を出なかった。しかし、敦煌文献の研究の進展とともに、従前は神話の世界とされてきた部分にも光が当てられ、歴史として復元されるようになった。「オジ」を示す名称を理解するためにも、吐蕃以前のチベット史を要約しておこう。以下の歴史に関する記述は特に注記しない限り、山口 (1983, 1988)

ノ与えることなく、兄弟一妻多夫婚を行っている、との Sternberg の文献を引用している。

による。

吐蕃王朝の祖先はヤルルン家である。ヤルルン家は6世紀前半に今の中央チベット⁽⁵⁾の諸族を統一して、後の吐蕃王朝の基礎を築いたのだが、そのヤルルン王家の祖先はずっと西のカイラーサ山の北東、シャンシュン地方にいたらしい。ヤルルンの祖先はピャー (Phyva) 族のプ (sPu) 氏である。ピャー族は下手のシャンシュンにいて、そこの外婚部族、主としてム (dMu) 族と2・3世紀以降婚姻を重ね、次第に勢力を伸ばした。「ム・ピャー族」として言及されるほどに一体化し、ピャー族または複合部族化したム・ピャー族は「神族四兄弟」の頃(3世紀末)ひとつの派を除く他の3派が東遷した。その一派がヤルルン王家の遠祖で、今日のウ地方(中央チベット)の東の端に落ちついた。コンポに残る碑文によれば、移住して2・3代後、この王家の直接の遠祖、ニャティ・ツェンポ (Nyag khri btsan po) のとき、さらに東進して、カム地方にいた同族の6氏族の上に君臨した(5世紀頃)。彼の母はム族の出身、彼自身も母方の里で生まれ、「ムの外甥」と呼ばれた。

この姻族ム族及びピャー族とは別に、シャンシュン上手に「女国」という国があった。⁽⁵⁾時代は特定できないが、彼らの末裔の一部も東遷して、同じく東遷していたピャー・ム族の一派オデ・ゲンギューの末裔と通婚し、さらにラン氏及びコ氏と結び、現在の四川省西北部に5世紀末頃「東女国」を建てた。これが後にヤルルン家と姻戚関係を持つに至るダン (sBrang) 氏である。

ニャティ・ツェンポから5代後のティデ・ヤクパ (Khri sde yag pa) はこのダン氏と通婚する。その結果、ティデ・ヤクパの子ティグム・ツェンポ (Dri gum btsan po) は「ダン氏の軍の王」とも呼ばれ、強力な同盟者としての母方親族の軍隊をも自由に動かさせたため、勢力を延ばし、ヤルルンに進出したが、その後安易に征西を行い、滅亡してしまう。後にティグム・ツェンポの二子によって再

(5) チベットには東西に2つの「女国」があったが、漢文史料には混乱が見られる。これについては佐藤・山口の研究を簡潔にまとめた森安(1992)の記述が有用であるが、山口は西チベットのシャンシュン地方にあった「女国」をラダックの北に比定し、チベット東方の「女国」はそこから東遷した者たちが建てた国と考えている。

興されてコンポとヤルルの二家ができ、後者を起こしたのが吐蕃王国の初代の王プデ・グンギェー (sPu de gung rgyal) である。この王から6代目のティ・ルンツェン (Khri slon mtshan) の時、中央チベットの勢力均衡を破る事件があり、これを機にヤルルン王はその地の覇権を握った。ティ・ルンツェン王はこの数年後に毒殺され、ソンツェン・ガンポ (Srong btsan sgam po) が即位する (596年頃)。この王が7世紀前半に国家統一を成し遂げ、吐蕃王国が成立するのである。

3 ヤルルン時代の「オジ」を示す語彙

これらの歴史文献の中で「オジ」を示す語彙はどのように使われているのだろうか？

山口 (1983, 1988) や佐藤 (1977) に見られる例では、khu は「父方のオジ」、zhang は「母方のオジ」を表し、チベット文語と形式・意味が一致している。これらの形式だけを問題とすると、khu が「母方のオジ」を表していた形跡はない。

にもかかわらず、私はこれ以前の段階 PTBまでは遡らない、いわば Pre-Tibetan の段階で、khu が PTB *ku に対応して「母方のオジ」を示す語彙であった蓋然性が高いと考えている。

WTには二次的親族関係名称として、spad, smad, skud という形がある。いずれも pha-spad のように複合語として現れることが多いが、Jäschke, Schmidt や Das の辞典に記載されるところを総合すると、これらの意味は、

spad 「父の子」

smad 「母の子」(Benedict 1942: 323では children in relation to their mother)

skud 「義理の兄弟」

である。これらは形態論的にすべて s-□-d のように分析し得る。□にあたる語根要素はそれぞれ pa < pha 「父」、ma 「母」、ku < khu である。接頭辞 s- の後では核音節初頭の p- と ph-, k- と kh- は対立が中和される (WT sph- と skh- は正書法上存在しない) ので、skud は「khu の子」ということになる。

ところで、山口・佐藤両氏らの例に見られるように、khu を「父方のオジ」と

解釈すれば、skud は「父方のオジの子」でなければならない。しかし、Jäschke, Schimidt, Das 等の辞典に記載されたこの語の共通の意味は「義理の兄弟」であり、さらに Das は skud に「妻の兄弟」の意も挙げている。また、skud-po には「義父」(Das 1902; 1970), 「妻の兄弟」(『藏漢詞彙』1957) の意があり、山口も skud-po は「嫁の兄弟」と「嫁の父」とであると注記している(山口 1983: 571)。第 1 節に論じたように、チベットは吐蕃王国成立以前から父系外婚制社会である。今、khu を「父方のオジ」とすれば、その子は自己(男性)と同じリネジに属し、その娘は自己の妻とはなりえない。自己の妻となる女性は他のリネジから婚入してくる女性である。したがって、khu の息子が「妻の兄弟」であるためには khu は妻の出身のリネジすなわち母方の男性でなければならない。

ここに我々は skud の語根要素 ku < khu の意味と文語チベット語以後の「父方のオジ」の意の khu との意味の矛盾を見る。

我々はすでに姉妹の息子=娘の夫=義理の息子=義理の兄弟、及び、母の兄弟=義父=妻の兄弟という母方交叉イトコ婚特有の等式を見たが、

skud 「義理の兄弟」=「妻の兄弟」

skud po 「嫁の父」=「義父」

というパターンはそれに酷似する。父系外婚制の下で母方交叉イトコ婚を愛好するチベット社会では、姻族の長「母方のオジ」は重要な存在である。⁽⁶⁾したがって、skud は本来「母の兄弟の子」でなければならず、その語根要素 ku < khu は、「母方のオジ」であったはずである。

それでは「父方のオジ」を表す語彙は何であったのか? チベット・ビルマ系の諸言語では多くの場合平行のオジは父と同源の語幹が用いられる。チベット語の場合も、おそらく「父」と同じであったと考えられる。⁽⁷⁾

(6) スタン(1971: 104)によれば、800年頃の碑文には母方の「賢い」オジが王の誕生や少年時代のめんどうを見、「父と子を、兄と弟を、母と子を、年長者と年少者を」喜びのうちに結びつけたことが語られているという。

(7) ベネディクトも khu 以外に「平行のオジ」は「父」と同根のものも再構成している(Benedict 1972: 316)。

また、文化人類学的立場からも、「社会的父」が各個人に属するのではなく、兄弟た

次に、khu はどのようにして「母方のオジ」から「父方のオジ」に意味転化し、zhang という形はどのようにして「母方のオジ」を示す語彙となったのだろうか？ベネディクトがその原因と主張する一妻多夫婚は第1節で述べたとおり、根拠が弱い。また、レヴィ=ストロースの言う母系制から父系制への変容も、論理的整合性からすれば最も受け入れやすいが、現在我々が手にする材料はすべてチベット社会が父系制であることを示すものであって、直ちに従うことはできない。

私は、khu が意味転化を起こしたから、そのギャップを埋めるために zhang が導入されたのではなく、

- (a) zhang が khu とは異なる意味での「母方のオジ」として、つまり、有標の語彙として導入され、
- (b) それが有力になったために無標化して一般に「母方のオジ」を表すようになり、
- (c) khu は語彙体系上未分化だった父と平行のオジを区別する機能を担うようになった、

と考える。

ヤルルンの遠祖ニャティ・ツェンポから5代後のティデ・ヤクパはダン氏と姻戚関係を結ぶが、この新しい姻族、ダン氏は自らを zhang po と称した。WT zhang po は「外戚」と解釈されているが、ダン氏が自分達の出自を「シャンシュン⁽⁸⁾のダン氏」としているのは注目に値する。

ちあるいは父親たちを含む集約的共同体に属する例は多々あり、特に、一妻多夫制のある社会に多い (Radcliffe-Brown, Leachなどを参照)。

さらにスタンも氏族の内部では各世代は等質不可分のまとまった集団として父とその兄弟 (父方のオジ) はまとまりをなし、(中略) そのうち長兄=長父、その他は「小父」と呼ばれた、と指摘する。

同氏は長兄を指す語 a-jo あるいは jo-jo は「父」をも意味する、としているので (スタン 1971: 89)、平行のオジが a-jo ~ jo-bo ~ jo-jo であった可能性はないではない。しかし、jo は一般に年長の男性に対する敬語であるから、その蓋然性は低い。

(8) ティグム・ツェンポの誕生によってヤルルン王家の外戚となったダン氏 sBrang は『アムド仏教史』(A mdo chos 'byung III f. 259a, 1. 4) の中に「zhang zhung sBra の王」と示され、Dar rgyas gsol ba'i sgron ma にも zhang zhung sBrang rje 「シャンシュン・ダン

この新しい姻族ダン氏の故地はシャンシュンにあったとされるところから、zhang poには「外戚」の意味以前に「シャンシュンに出自を持つもの、シャンシュン出自の姻族」の意があったのではないだろうか？ シャンシュンの zhang はもっぱら地名を表す固有名詞であり、普通名詞としては存在しない。シャンシュンはヤルルン家にとって gnyen「姻戚」の重要な地であることが知られており⁽⁹⁾、ティデ・ヤクバ以降ソツェン・ガンポに至るまでの外戚がすべてシャンシュン出自というわけではないが、シャンシュン出自の姻族が大きな比重を占めていたことは間違いない。だからこそダン氏は後に（8世紀末頃）自らを zhang rgyal「シャンシュン出自の姻族の王」⁽¹⁰⁾と位置づけようとしたのである。

ティグム・ツェンポが母方のダン氏の軍を動かさせたことから分かる通り、

ノ王と呼ばれて、その氏族のシャンシュン起源が明示されている（山口 1983: 226-227）。

山口（1983）の考証によると、sBrang氏はドメー地方の金川地区にラン氏と共に5・6世紀頃「東女国」を建てたが、もとは西方の「女国」（上手シャンシュンにあったとされる）を建てた氏族で、その後、東遷したと考えられている。東「女国」の王姓sBrangが、西「女国」の王姓Suvarṇa「金」の転訛であることについても、山口説をまとめた森安（1992）を参照。

- (9) 2・3世紀以降ヤルルン王家の重要な姻族の一つであったム族はシャンシュンにその拠点をもち、また、新しい姻族ダン氏も西方の「女国」を建てた氏族の一派が東遷したもので、その故地はシャンシュンであったという。また、『年代記』冒頭に、zhang zhung lte bu // gnyen gyi yang do // 「シャンシュンのごときは姻戚としても大事な相手方であり」とある。さらに、王女セーマルカルはヤルルン王家の「姻戚」であるシャンシュンの王家に嫁いでおり、（後代の所伝によると）シャンシュン女リティクメンをソツェン・ガンポがめとったとされる（山口 1983: 339-340）。これから考えると、ソツェン・ガンポ王を含めて、それ以前の王がシャンシュンから妃を迎えていたことになり、シャンシュンの姻戚としての重要性がうかがえる。

16世紀の歴史家バオツク（Ja章 11a）によると、伝説的な古代では母の氏族を指して zhang という語を初めて用いたらしいのはトトリの子ティニェンスンツェン王だとしている（スタン 1971: 104）が、これは後代のボン教側からの資料の再構成を経た結果ではないかと思われる。

- (10) 『寺院総攬補』f 259aに「Shaṅ shuṅ sBraの王に対しては Shaṅ rgyalの系統と名付ける」とあり、山口（1971:6）は「shaṅ rgyalとは shaṅ poの王を縮めたもので、shaṅ shuṅ系のsBraが吐蕃王家の母系氏族であったのを固有名詞化して称したものである」と述べているが、注記（ibid. 42）での shaṅ poの解釈は筆者と異なる。シャングルの系統はいつの頃か確認されていないが、山口（1983:715）はツァワロン支配はティソン・デツェン王（742-797）代より後だがそれより余り遅れないと推論している。

母方の親族 (zhang po) の代表者 zhang は極めて重要な人物であった。⁽¹¹⁾ zhang は父系外婚制にあっては母方のオジである。かくて、zhang / zhang po の中核的意味は「シャンシュンに出自を持つもの」→「シャンシュン出自の姻族」→「姻族の代表者」→「母方のオジ」のように意味転化したと考えられる。特殊な内容を持った、意味的に有標の語彙がやがて一般的な「母方のオジ」という親族関係名称に変化していった訳である。

khu はこれにともなって父方の平行のオジを示す語彙となり、父と父方のオジが形式の上で未分化だった状況を解消したのである。

khu については、ヤルルン家の再興に尽力したタルラ・キュー (Dar la skyes) がク (khu) 氏と名づけられたことに関し、考察すべきことが残っているが、これについては他日を期したい。

また、WT khu を「男精」と関連づけようとする説がある。⁽¹²⁾ 確かに WT の段階では khu に「オジ」と並んで、その意味がある。しかし、「男精」を示す WT khu は PTB *kliy “shit / guts / stomach” (Matisoff 1978 : 215) から来源するもので、⁽¹³⁾ 「オジ」を表す khu とは関係がない。

【謝辞】 東洋文庫研究員テンパ・ギェンツェン師には、現代の親族名称の用法についてお教えいただいた。また、大阪大学の森安孝夫先生と京都教育大学の武内紹人先生には、草稿に目を通していただき、貴重なコメントを賜った。諸先生の御指導に厚く御礼申し上げたい。

(11) 王妃の一族から出た大臣は zhang と呼ばれ、吐蕃王国の政治に大きな力をふるうことが知られるが、これは母方のオジ (=zhang) が婚姻連帯においていかに重要であるかを、また、彼がいかに政治力を持っていたかを示すものである。

敦煌文献以降は、zhang po は専ら「王母を出した氏族」に対して用いられる。

(12) 山口 (1983 : 562) によれば、khu は khu / khu ba 「男精」(『藏漢辞典』vol. 1 p. 28a, 1932 青海) から khu ba byed po 「精液を造るもの」→《rkang mar》「骨髓」(格西曲札『藏文辞典』p. 79 ; 『藏漢辞典』vol. 1 p. 13b) に結びつくので、初めから rus 「骨」や rus pa 「父系血統」と関係があると考えている。これは民俗のレベルでの生殖理論的解釈であって、言語学的な史的再構成とはおもむきを異にする。

(13) PTB *kliy の初頭の子音結合は WT kh- と対応する。また、音節尾部 PTB *-i(y) と WT -u の交替現象は一般的である。

引用文献

- Aziz, B. 1974 Some notions about descent and residence in Tibetan society. in C. von Fürer-Haimendorf (ed.) *Contributions to Anthropology of Nepal*. Warminster, Aris and Philips, London.
- Bell, C. 1928 *The People of Tibet*. Oxford University Press, London.
- Benedict, P. K. 1941 *Kinship in Southeastern Asia*. Ph.D. dissertation, Department of Anthropology, Harvard University.
- Benedict, P. K. 1942 Tibetan and Chinese kinship terms. *HJAS* 19 : 313-337.
- Benedict, P. K. 1972 *Sino-Tibetan : A Conspectus*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Briffault, R. 1969 *The Mothers — the Study of the Origins of Sentiments and Institutions —*. Macmillan, New York.
- Das, C. 1970 *Tibetan-English Dictionary*. Motilal Banarsidass, Delhi.
- デシデリ, I. 1991 『チベットの報告1』平凡社 東京.
- デシデリ, I. 1992 『チベットの報告2』平凡社 東京.
- Goldstein, M. C. 1978a Adjudication and partition in the Tibetan stem family. in D. Buxbaum (ed.) *Chinese Family Law and Social Change*. University of Washington Press, Seattle.
- Goldstein, M. C. 1978b Pahari and Tibetan polyandry revisited. *Ethnology* 17(3) : 325-337.
- Grenard, F. 1974 *Tibet — The Country and its Inhabitants*. Cosmo, Delhi.
- Jäschke, H. A. 1968 *Tibetan-English Dictionary*. Routledge & Kegan Paul, London.
- Leach, E. R. 1955 Polyandry, Inheritance and the Definition of Marriage. *Man* 55 (No.199) : 182-186.
- Levine, N. E. 1981 The theory of Rü kinship, descent and status in a Tibetan society. in C. von Fürer-Haimendorf (ed.) *Asian Highland Societies — An Anthropological Perspective*. Sterling Publishers, New Delhi.
- レヴィニストロース C. 1978 『親族の基本構造(上・下)』番町書房 東京.
- Matisoff, J. A. 1978 *Variational Semantics in Tibeto-Burman*. ISHI, Philadelphia.
- 森安孝夫 1992 蘇跋那具怛羅. 桑山正進(編)『慧超往五天竺国伝研究』京都大学人文科学研究所 京都 : 88-89.
- Peter, H. R. H. Prince of Greece and Denmark 1955 Polyandry and the kinship group. *Man* 55 (198) : 179-181.
- Peter, H. R. H. Prince of Greece and Denmark 1963 *A Study of Polyandry*. Mouton, The Hague.
- Peter, H. R. H. Prince of Greece and Denmark 1965 The Tibetan family, in M. F. Nimkoff (ed.) *Comparative Family Systems*. Houghton Mifflin, Boston.
- dPa' po gtsung lag phreng ba 1545 *Lho brag*.
- Radcliffe-Brown, A. R. 1952 *Structure and Function in Primitive Society*. Cohen and West, London. (1987 『未開社会における構造と機能』新泉社 東京.)
- Richardson, H. 1952 *Ancient Historical Edicts at Lhasa and the Mu tsung / Khri gtsung lde btsan treaty of A. D. 821-822*. The Royal Asiatic Society. London.

- 佐藤長 1958 『古代チベット史研究(上・下)』同朋舎 京都.
- Schmidt, I. J. 1969 (1841) *Tibetisch-Deutsches Wörterbuch*. Biblio Verlag, Osnabruck.
- 『新編藏文字典』1989 青海民族出版社 西寧.
- スタン, R.-A. 1971 『チベットの文化』岩波書店 東京.
- 田村實造・今西春秋・佐藤長 1966 『五體清文鑑譯解』京都大学 京都.
- Tucci, G. 1955 The secret characters of the kings of Ancient Tibet. *East and West*, 6 : 197-205.
- 山口瑞鳳 1971 東女国と白蘭. 『東洋学報』54 (3) : 1-56.
- 山口瑞鳳 1983 『吐蕃王国成立史研究』岩波書店 東京.
- 山口瑞鳳 1988 『チベット(上・下)』東京大学出版会 東京.
- 『藏漢詞彙』1957 青海民族出版社 西寧.